

婦人問題通信講座

21世紀を創る

— 男性と女性 —

静岡県企画調整部県民生活局婦人課

第三章 現代家族と婦人

静岡大学助教授 馬居政幸

(一) アプローチの仕方について

章題が問いかけるものは

今日、「現代家族と婦人」という本章の章題に類似した内容を、研究書、啓蒙書、マスコミ、講演などにより読んだり聞いたりする機会があつた方は多いと思います。そこで、講議を始めるに際し、「現代家族と婦人」という本章の章題の意味について考えることにより、この課題に対する私(筆者)のアプローチの仕方について述べておきたいと思ひます。

まず、「現代家族と婦人」という章題には、次の五つの問いが含まれていると考えます

①「現代」とは何か。②「家族」とは何か。③「現代家族」とは何か。④「婦人」とは何か。⑤「と」により結びつけられる「現代家族」と「婦人」とは何か。

また、このテキストは「婦人問題通信講座」のための本ですから、五つの問いの前提には「婦人問題」という視点があると考えます。

としますと、⑥「婦人問題」とは何か、⑦「現代家族と婦人」の「婦人問題」とは何か、という問いを加える必要があります。

このように章題の意味を捉えますと、⑥の問いに対し第一章「婦人の現状」が当てられているように、①―⑦の何れの問いも簡単には答えを得られそうにない大きな問題を含んでいることが理解できると思ひます。逆にそのためか、書店でここに上げた問いを書名とする本をさがすことは、そう困難ではないと思ひます。

あなた自身の世界の問題

しかし、考えてみれば「現代」「家族」「婦人」「問題」と、いずれも日常生活でよく使われる言葉でもあります。さらになによりも、本書を読まれる方が結婚をし子供を育てている三十代後半の女性であれば、「現代」「家族」「婦人」「問題」というのは言葉ではなく生きてある姿そのものであるはずで、また、それ以外の方でも、過去であるか未来であるか、あるいは自分自身か身近な人の姿であるかは別としても、具体的に経験したり知ることのできる世界であるはずで、

普段なにげなく使っている言葉に対し、いざその意味を問い始めると必ずしもはつきりとした答えが見つからない経験をした方は多いと思ひます。その答えを改めて自分の生活を見つめ直すことから

表1 この章で使用する用語の意味について

用語	意味内容
①現代 (広義)	戦後の日本社会
(狭義)	高度経済成長以降の日本社会
②家族	近親者を中心とした人間の集まりの単位
家庭	家族が生活する場
③現代家族	戦後の時代の流れの中で今も変化しつつある家族
④婦人	成人した女性
⑤現代家族「と」 婦人	「と」とは「現代家族」と「婦人」の「関係」として捉え、現代の家族のあり方と婦人と呼ばれる女性のあり方がどのように関係しているかに焦点をあてる。

得た経験を持っている方も多いと思います。あるいは、わかったと思っていたことが、何かの機会に別の考えがあり、いろんな考え方ができることを経験した方もまた多いと思います。

「現代家族と婦人」という本章の章題が、まさにそのような言葉ではないでしょうか

ところで、先にも述べましたように、このテキストは、婦人問題通信講座のために編集されたものであり、それも、じっさいに婦人として生活されている方を主として対象にしたものです。したがって、少なくとも「現代家族と婦人」という課題に関する限り、このテキストを読まれる方の多くは、一般的、抽象的、客観的な問題としてではなく、個別的、具体的、主観的な問題として「現代家族と婦人」の世界に生きておられる方々であると考えます

このことから、「現代家族と婦人」への問いは、なによりもこのテキストを読まれている方自身が、自分の生きていく世界に向けたものでなければならぬと考えます。逆に、いかに高度な論理や統計的に正確なデータや科学的に書かれたものであっても、読まれる方の生きていく世界と関わりがないものとして、いいかえれば、一般的な知識として理解されたなら、テキストとしての意味は失われてい

ると考えます。

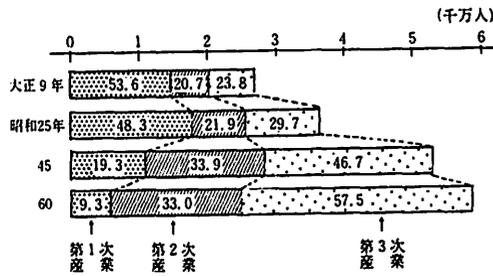
私自身の世界の問題でもある

そして、そのことは、この文章を書いている昭和二十四年生まれで二男二女の父親である私自身にも当てはまることです。「現代家族と婦人」の「問題」とは、まさに私の妻や母の問題です。さらにいうまでもなく、妻は夫という男性の存在を前提とする女性のありかたです。とすれば妻の問題は夫である私自身のありかたと無縁ではないでしょう。母の場合も同様です。

したがって、「現代家族と婦人」という課題に対して、ここでは可能な限り正確なデータや新しい考え方を紹介しつつも、基本的には私自身の家族や家族観との関わりを基準として述べていくつもりです。そのため内容はかなり限定されたものになり、広く「現代家族と婦人」の問題に対して知見を広めようとする方には不満足なものになると思います。しかし、少なくとも自分自身や身近な家族のあり方を見つめ直すために理解しようとする方には、なんらかの示唆を与えられるような内容にしていきたいと考えます。

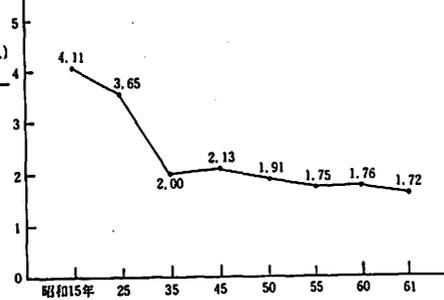
そして、その第一歩とするために、具体的な考察に入る前に、あ

図4 産業別就業者数の推移



資料「国勢調査」

図3 出生児数の推移 (合計特殊出生率)



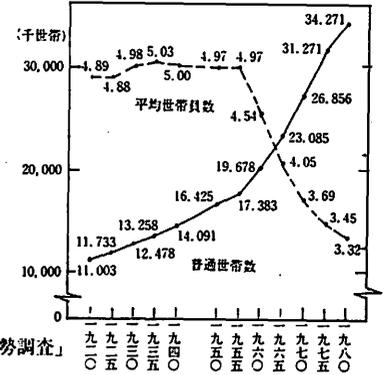
資料：厚生省「人口動態統計」
 (注) 合計特殊出生率=1人の女子が再生産年齢(15-49歳)を経過する間に生むと考えられる子供の数

図2 家族構成別普通世帯の比率の推移

年	核家族世帯 (%)	直系家族世帯 (%)	その他 (%)	単身世帯 (%)
大正9年 (1920)	54.0	約31	約6	6.6
昭和30年 (1955)	60.6	32.6	3.4	3.4
昭和35年 (1960)	60.2	28.6	7.1	4.7
昭和40年 (1965)	62.5	24.3	5.3	7.9
昭和45年 (1970)	63.5	22.5	3.3	10.8
昭和50年 (1975)	63.9	20.2	2.3	13.5
昭和55年 (1980)	63.4	20.7		15.8

資料：「国勢調査」

図1 普通世帯数及び平均世帯員数の推移



資料：「国勢調査」

えて、私自身のこの問題に対するアプローチの仕方を述べるために一節を設けたわけです。

なお、この章で述べる「現代家族と婦人」の意味を表1に整理してみましたので参考にして下さい。

(二) いま、女性にとって家族とは

1 現代家族の特性とされるもの

家族が小さくなる

現代の家族の特性を語る上で、必ずといってよいほど指摘されるのは、家族の規模が小さくなったことと、家族を構成する人間関係が単純になったことです。そのことを端的に顕すのが上に示した三つの資料です。これもよく使われるので知っている方も多いと思いますが、一応、グラフによってその傾向を見ておきます。

国勢調査に基づく全国の世帯の総数と各世帯を構成する人数の変化(図1)を示すグラフをみると、世帯総数が右上がりになっていきます。これはいうまでもなく、世帯数が増えていることを示してい

ます。逆に、平均世帯員数は一九六〇年以後急激に右下がりがなっています。世帯の数が増えたにも関わらず一世帯当たりの人数が減ったとなれば、当然家族の規模が小さくなったといえるわけです。

その理由の一端を示す資料が図2と図3です。この二つの資料から、核家族世帯と単独世帯の割合が増え直系家族世帯が減ったことと、出生率が下がったことがわかります。

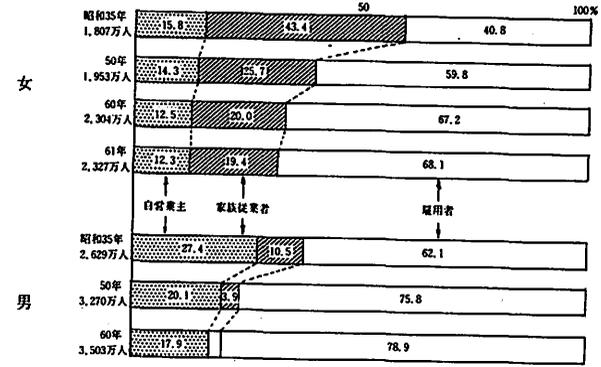
核家族世帯は、夫婦のみか夫婦と子供からなる世帯であり、その子供の数も少ないこと、あるいは、単独世帯は文字通り一人です。そこにおける人間関係は単純化してきたといえるわけです。

家族の中のことが家族の外でまかなわれるようになった

資料図4が示すように、現在の日本は第一次産業が一割以下で、第二次産業が約三割、残りの六割が第三次産業です。また図5に見るように、働く人の約七割が雇われている人です。それは働く場、いかえれば生産の場が家族の外にあるということですが。

農林水産業という第一次産業を中心とする社会では、家族は生産の単位であるとともに消費の単位であり、人々が生きていくうえで様々な機能は、基本的に家族の中でまかなわれたといわれます。

図5 従業上の地位別就業者構成比の推移



資料：総務庁統計局「労働力調査」

しかし、今日では、生産は企業、教育は学校、病氣は病院、着物はデパートやスーパー、そしてさらには洗濯はクリーニング店、食事はファミリーレストランやファーストフードの店屋や宅配業……と家族の外でまかなうものが多くなりました。これを家族の機能の外部化といいます。

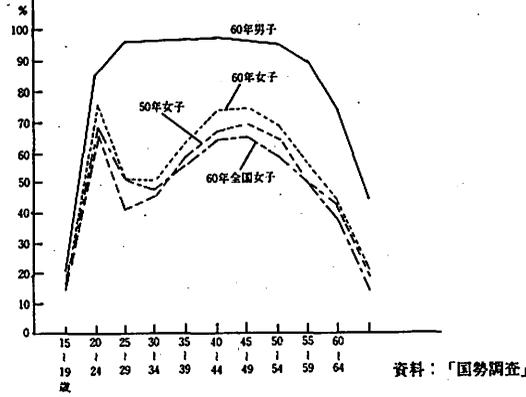
このような傾向をふまえ、今、家族のみがなしうる機能は、①子供を育てること（子供の社会化）と、②家族の人達が安心して休む場（パーソナリティの安定）の二つしかないといわれます。

ではこのような家族の状況の中で、女性はどうのような位置にあるかについて次に見てみたいと思います。

女性のM字曲線が示す家族との関係

資料図6は昭和五〇年と六〇年の国勢調査による年齢階級別就業率を示したものです。男性の場合、二〇代前半で急激に上がり逆に五〇代後半以降急激に下がる台形の形をしています。その理由についてはあえて説明することもないでしょう。それに対し女性の場合、二〇代前半に第一の山があり、三〇代前半を谷として、三〇代後半から再び上がりはじめ、四〇代から五〇代にかけて第二の山を

図6 年齢階級別就業率 (静岡県)



資料：「国勢調査」

もっています。

このグラフの形がアルファベットのMに似ているため、女性の就業率の特色をM字曲線というわけです。このような曲線が描かれる理由についてもすぐ理解できると思いますが

もっとも、このグラフの詳しい意味は経済の問題ですので次章を見てください。ここでは、このような女性の働くパターンと家族との関係のみを読み取って下さい。

まず、結婚前の八割近い女性は、娘と息子、あるいは仕事の内容の男女差はあるものの、家族との関係では男性と大きな差はないといえます。それが、結婚もしくは子供ができた時に大きく変わり、家族が生活する場である家庭での仕事を専門的に担う女性（一般に専業主婦と呼ばれる女性）が多くなります。

しかし、その後、三〇代後半から子供に手がかからなくなるに従って、再び家族の外に働く場を見出していくといえます。ただ、後半の場合は男性と同様ではなくいわゆるパートとしての就業が多く、家庭内の仕事は女性が担うというパターン自体は大部分の家族で継続され続けているといえます。（第四章参照）

また、谷間の二十代後半から三十代にかけても、四〜五割の女性

がならんかの意味で家庭の外に働く場をもっていることは無視できない事実です。この点を家族における子供の教育力の低下などの原因として指摘する意見もあります。

しかし、その当否は後に述べるとして、ここでは今日の家族をもつた女性には、①家庭の中の仕事と家庭の外の仕事という二つの働く世界を持つ人が少なくないこと。②その割合は年令により一定の傾向をもって変化すること。③その変化の要因は家庭の中の仕事、特に育児との関係にあるということを確認しておきます。

以上、現代家族の特色を、規模の縮小、機能の外部化、女性の就業構造の年令別変化と家族との関係という観点から見てきました。いずれもよく取り上げられることですので、既にご存知の方も多いと思います。これらは国勢調査をはじめ厳密な調査によるデータに基づくものでもあります。しかし、前節で述べたように、問題はここから始まります。

すなわち、ここに提示した特色が、このテキストを読まれている個別的で主観的な一人一人の家族の状況を見る上で、どのような意味をもつかを問うことが本節の課題です。その事について私自身の家族を例として次に述べてみたいと思います。

2 私の家族の場合

家族は小さくなったのか

私の家族は妻と二男二女と私の母の七人です。ただ、一年のうち何箇月かは祖母が同居し、逆に、母は田舎に帰る事も多く、時期によって、核家族、三世代家族、四世代家族と変わります。

長男は小学校五年、長女は小学校一年、次男は幼稚園年中組、次女は三才です。

どうもわが家には「家族が小さくなる」という一般的傾向は当てはまらないようです。しかし、関係がないわけではありません。

まず、私の知る限り四人の子供をもつ家族は確かに少数派です。その結果、いくら私の子供が多くても、息子や娘の友達の多くはいわゆる長男と長女。子供は成長するにしたがい、家族内の人間関係よりも遊び仲間の間で自己を形成するといわれます。とすれば、わが家のみ四人兄弟・姉妹では少子化の影響を免れないとも考えられます。

一方、人間の基本的な形成は幼児期になされるとも言われます。その意味で、二男二女の組み合わせによる人間関係はかなり複雑な

表2 結婚持続期間15年以上の妻の平均既往出生児数
(単位：人)

調査年次	結婚持続期間	
	15年～19年	20年以上
第1次(昭和15年)	4.27	5.04
第2次(昭和27年)	3.50	4.93
第3次(昭和32年)	3.60	4.72
第4次(昭和37年)	2.83	3.90
第5次(昭和42年)	2.65	3.44
第6次(昭和47年)	2.20	2.68
第7次(昭和52年)	2.19	2.40
第8次(昭和57年)	2.23	2.28

資料：厚生省人口問題研究所「第8次出生力調査」「図説 現代日本の家族問題」より

子供は一人の時代は来るか

一〇九ページで見た出生率の表によると、昭和六一年度の出生率は一・七二となっています。これを見ていよいよ最近の夫婦は子供を一・七二人しか生まず、子供は一人という時代になったと思われる方がいるかもしれません。事実そういう論調で報道するマスコミもありました。しかし、それは間違いでしょう。

このデータは未婚の女性も夫と離婚や死別した女性も含めた出産可能な全ての女性をもとに計算されたものです。実際に夫を持つている女性の出生児数は、表2に見るように二人をきったことはありません。妻となった女性が希望する子供の数が平均二・六人で、これはあまり変わっていませんので、多分余程のことがない限り、今後一人子の時代がくることはないと考えます。ただ、「一括出産型」といわれ、子供を生む年令と期間が二〇代後半に集中している人が六割近くいます。

出生児数の減少よりもこちらの方が女性と家族の関係を考える上で重要でしょう。先に示したM字曲線の第二の山が早く高くなる可能性があると考えるからです。私の妻の場合も下三人を集中して生んでいますのでどうなるでしょうか。

ものになり、長男長女の問題はクリアするのも知れません。しかし、考えて見れば四人といっても私の親の世代に比べれば決して多いわけではありません。ちなみに父は七人兄弟です。長姉の子供と共に育ち苦労した話をよく聞かされました。

逆に、現代の就学前教育の普及は実質的に子供達の人間関係を広げているといえます。たとえ四人いても、幼稚園や学校にいかなければ多様な人間関係はつくれません。また、そのため上から順々に幼稚園、学校へと進みますので、私の末っ子の次女は一人である期間が他の子供より長くなり、一人子的要素は強くなるでしょう。他方、次男は三人目であまりかまってもやれず、そのためか上の二人に比べおとなしくて心配したのですが、幼稚園に入れることにより活発になりました。

このように考えますと、現代家族の特性とされる家族規模の縮小は、もし問題があるとすれば、小さくなったこと自体ではなく、家族の誰かが行き来する家族と家族の関係や、家族の外にある様々な制度との関係にあるといえます。

ところで家族が小さくなったもう一つの要因である核家族化の問題はどうでしょうか

核家族は問題か

核家族になることにより、祖父祖母による伝統文化の伝達がなされにくくなり、特に、子育ての先輩としての智慧が生かされず、家庭の教育力が落ちたといわれることがあります。しかし、私が経験する限りことはそう単純ではないと考えます。

わが家の場合、先に述べたように、母が同居している時は三世代家族になりますが、長男が生まれた時はまさに核家族でした。住んでいた所は埼玉県の新興住宅地。近所に知り合いなし。私はまだ学生（大学院）で妻は教職の身。夜泣きする息子を抱いて途方にくれたことが幾度ありました。しかし、その時期に最も頼りになったのは、妻が勤めに出るため昼間子供の面倒を見てくれた人でした。逆に、妻が電話で故郷の母に子育ての問題を質問しても昔のことと忘れたとの返事でした。

現在同居している私の母の場合も、一人息子の私しか育てたことはなく、未経験の四人の孫を相手に四苦八苦。おまけについ最近ま

で男と対等に働いていた人ですから、気の強さは相当なものです。伝統文化の伝達どころか気性の激しい母のどなり声のみが子供の耳に残る毎日です。もともと、それでも子供達はオバアチャンが好きなのですが。

一方、年寄りがいるために思うように子育てができなかったり、嫁と姑の問題に悩む人も少なくないと思います。

確かに、核家族のみで子供を育てることはかなりの困難を伴うことは事実でしょう。しかし、だからといって単純に多世代がいいというわけでもないことを生活実感として持っている方は多いのではないのでしょうか。

ここでも、問題は、核家族か拡大家族かという形態にはなく、家族の内と外の間関係や家族を取り巻く制度のありかたによって、変わると思います。

では機能の外部化についてはどうでしょうか。

機能を外に出すことにより家族の機能は少なくなったのか

私の家族の機能を見るために、家庭にいる時間が最も長い、妻の最近の一日の行動を述べてみます。

朝、六時前に鳴る目覚ましにより、学校でいわれたNHKの番組を見せるため長男を起こす。自分は番組終了時に合わせて起き長男と長女の朝食の用意、七時半ごろ二人を送り出しながら残りの二人の朝食の用意、食べている間に前夜洗っておいた洗濯物を干し、昨日の残りと新たに朝脱いだものを洗濯機に。その間に私が起きてきてウロウロしながら子供の朝食を監督、時に食べさせる。それを見て私と自分の朝食を用意。九時前に次男を幼稚園へ送っていく。帰ってきて私を大学へ追い出し、朝食を片づけたあと再び洗濯、そして掃除。それでだいたいお昼前。昼食を次女とすませたころ子供が幼稚園から帰る。天気が悪ければ迎えに行く。子供が帰れば、四人の内のだれかが近所や幼稚園・学校の友達を連れてきてわが家は小さな台風に襲われる。気がついたら夕方。夜の食事の用意がはじまる。その前に買物に行く日もある。子供四人に食事をさせたあと長男の宿題の監督をしながらあとかたづけ。風呂に子供を入れ寝つかせてはっとしたらもう一〇時。そのころ私が帰ってきて夫婦で遅い夕食。やっと夫婦の語らい。相互に一日の報告をして就寝は一〜二時。

もともと、ここにあげたのは私知っている限りのことだけです

ので、他にもなにかやっているのかもしれませんが。

私の妻の一日の行動は、子供に関わることが多く、四人いることの影響が大きいようです。が、少なくとも複数の小学校低学年以下の子供がいる家庭で専業主婦と呼ばれる女性の一日は、このような状況と大差ないと思いますがいかがでしょうか。

その意味で、家族の機能が子供を育てることに集中していることは事実です。しかし、他の機能は本当になくなったのでしょうか。

外でまかなえるようになって楽になったか

確かにわが家の場合も、私が仕事のために外へでかけ、子供は学校と幼稚園へ行きます。病気になるれば病院へもいきます。しかし、妻はそのために家庭の中のことを一人でやらねばなりません。子供を学校や幼稚園に通わすことに伴う妻の家庭での仕事は決して少なくありません。病気は病院でみてくれますが、治すためには家庭での妻の看護が必要です。食事も外で食べたり、惣菜を買うこともありますが、三度三度ではあきてきます。何よりも安月給では無理です。洗濯も同様、クリーニングは特別なものだけ。(母がいる場合は仕事を分担しますが、それ故に別の負担が増えることも…)

このように考えると、家族の機能が外部化することにより、むしろそれに伴う新たな仕事や家庭の仕事として増えてきているともいえないでしょうか。それも主として主婦と呼ばれる女性の仕事として。

加えて、家族が休む場（パーソナリティの安定）として家庭の重みが増せば増すほど、そのための準備もまた多くなっているのではないのでしょうか。その典型が家族の誕生会や一家そろってのレストランでの食事や家族旅行などの家族内イベントです。それらは主婦を忙しくすることはあっても楽にすることはないと思います。

M字曲線への誘い

もともと、わが家の場合も末っ子の次女が小学校に通うようになれば事情は変わってくると思います。極端に忙しい朝の一時期を除き時間的にはかなり余裕が出てくるでしょう。ところが、それは子どもの教育に金がかかる時期でもあります。私の収入で四人の子供を大学にやれるかどうか。おまけに、マスコミ、ミニコミ、クチコミと各種情報が直接家庭の中に飛び込んできます。子供も成長するにしたがい妻が知っているはずの子供とは違ってくるはずですよ。

のまま家庭にいていいものかと悩むようになるのがむしろ自然でしょう。妻もその時は外に出るといっています。その時に仕事をするか、勉強するかは別としても。我が家の妻の場合もM字曲線を描きつつあるようです。

さてこれまで、一般に現代家族の特性といわれているものについて、我が家の状況に当てはめながら確認してきましたが、どこが問題を簡単にはいえないようですよ。そこで、少し理論的になります。が、論点を変えてみたいと思います。

3 あらためて現代家族の特性とは

小さくなって独立した

現代の家族の規模が縮小しその中の人間関係が単純になったことは否定できない事実です。ただそのことを自分の家族は多いから関係ない、自分の家族は少ないから当てはまると考えることは少し軽率です。まして、大きいから大丈夫、小さいから心配だとなると誤りといえます。核家族のことにしても同様です。大きくて多世代が一緒に住めばいいというわけではないことは、六人から八人家族で

あるわが家の問題からも理解できるように。逆に小さい家族であっても、他の家族との繋がりや家族の外にある様々な社会の仕組みを利用することができれば、家族の縮少をカバーできるといえます。ところが問題はここにあります。他の家族との繋がりを強くしたり、様々な社会の仕組みを利用することはそれほど簡単なことではないはずで。

子供が近所の友達と遊びたいといっても、相手の家庭の方針が子供は学校から帰ったら勉強、というのであれば、遊びに行かせることはできないと思います。あるいは、隣の夫がいかにも横暴な男でも、頼まれもしないのに注意することはできないでしょう。

なぜこのようなことが生じるか。それは、次のような家族に対する考え方があるからです。

一つ一つの家族は互いに干渉することも、されることもあつてはならないこと。いいかえれば、家族は相互に独立した存在であるという考え方です。このことは家族のプライバシーを守る上で非常に重要なことです。しかし、その代償として、他の家族との繋がりをつげるためには、相手の同意を得るという手続きと努力が必要となるわけです。

独立して私ごとになった

子供を保育所に預けて働いているお母さんなら、子供が熱を出したから迎えに来てください、との保育所からの電話で、肩身の狭い思いをしながら職場を後にした経験のある方も多いと思います。逆に外に仕事を持っていないお母さんは、余程のことがない限り、家族のことで夫の職場に電話することはないと思います。

なぜ会社に気兼ねしたり、保育所のことを聞かなければならないのでしょうか。

それは、子育てに代表される家族に関わること、家庭を舞台として生じることは全て私ごととしてみなされるからです。

さらに、私事とは公事に対する言葉であり、それも私事は公事よりも一段低くみられてきたという経緯があります。そのため、たとえ家族に関わることで様々な施設や仕組みがあつても、その利用方法の基準は、「わたくし」の家族の方ではなく、「おおやけ」の施設や仕組みの方にあることが多いのです。また利用できたとしても、そこでのトラブルは家族の側で処理しなければならず、それも公事に支障がない限りという条件つきの場合が多いと思います。

すなわち、家族の縮少が、家族相互の独立と家族の中のことが私

事としてみなされることとセットになっていること、これが現代の家族の特性です。いいかえれば、現代の家族の特性としての縮少とは、単に家族を構成する人が少なくなつて単純になつたというだけでなく、家族と家族の関係、家族と他の社会の仕組みとの関係の希薄化を伴うものです。このことを家族の私化といひます。

私わたくしことになつたことはいひことだが

このように考えてくると、家族は私化することにより悪くなつたと捉えられるかもしれませんが、少なくとも私はそうは思いません。家族は私化することにより多くのことを得ました。その代表が我が子という子供の捉え方です。もちろん家族が私化する以前も自分の子供は我が子でありましたが、それは同時に○村の□□家のあととりといった自分と子供が所属する土地や家の伝統的立場に規定されてもいたはずです。天皇の赤子せしという国家に規定される時代もありました。我が子であつて我が子でないという悲しい思いをしたお年寄りも多いとおもひます。

しかし、現在はいくら企業が強くても××会社の子供として自分の子供を考えることはいひと思ひます。むしろ、夫はうだつのあがらない会社にいるけれども我が子は大会社にと秘かに決意してゐるお母さんもいるのではないでしようか。いわば家族の私化とは、自由で平等な社会の最も基本となる理念だと考えます。

しかし、問題は「わたくし」の家族と「おおやけ」の世界との関係です。それは家族の機能に関わる問題でもあります。

むかしの家族はなんでもやつていたか

先に一〇九ページで、家族の機能が外部化したといひました。しかし、よく考えると、元々、子供の教育や稼ぎを得るための仕事などの外部化したといわれる機能が、全て家族の中で一組の夫婦の責任のもとに行われていたわけではありませぬ。それらは、一つの村全体の中で、あるいは隣近所と一緒になつて、そして今でいう核家族が複合した□□家という親族関係の中でなされていたはずです。

例えば、村八分という言葉があります。これは村のおきてに反した村人とその家族を、火事と葬式を除き、他の村人が申し合はせてのけものにする事です。現在ではほとんどこのようなことはなされな思ひます。その理由は基本的人権に反するといふこともありますが、実質的に罰則として意味をもたないといふ側面もあると

思います。この行為が罰則であるためには、他の村人、それは家族の集合したものもありますが、から無視されては一つの家族は生活できないという現実が必要だからです。

現代は、火事や葬式でさえ消防署と葬儀社に頼めます。まして、日常のことで他の家族から無視されれば生活できないということはまずないといえます。たとえ少々不便でお金がいっても、隣近所に気兼ねするよりは自由であることを選ぶ人が多いとおもいます。

ということは、外部化したといわれる家族の機能とは、実はその多くは村全体や隣近所が担っていたもの、いいかえれば共同体的秩序に組み込まれた機能であったといえます。

ムラ社会と家族が、「おおやけ」と「わたくし」に分かれたが

従って、家族の私化とは次の二つの側面があると理解できます。

一つは家族が伝統的な共同体的秩序から私的なものとして独立したことです。もう一つは、共同体が担っていた機能が公的な機関や企業として独立したことです。

そして、前者の結果、家族は多くの自由を得ました。ただ、その自由も無条件ではありません。具体的には、後者の公的なものを選

択する自由です。選択するためには様々な条件を知る必要があります。選択した結果に対する責任の問題もあります。

ところが、「おおやけ」の原型はムラ全体です。「わたくし」は村八分の対象であった一つの家族です。どちらを優先するかは自ずとさまるわけです。

そして、「おおやけ」が男に、「わたくし」が女に割り当てられたこともあえていうまでもないでしょう。

ムラと一体から「おおやけ」を支える「わたくし」に

しかし、いくら公と私に分かれたといっても、本来は一体として行われていたものです。それが社会の制度として分離したとしても全く関わりないというわけにはいきません。

公事の世界の典型である仕事も、家族と無関係ではやっていけないはずで、私事の世界の代表である子育ても学校や幼稚園などの公の世界を無視してはできないと思います。

たとえば、父も母も家庭をとるか仕事をとるか悩むことも多いはずで、しかし、私事よりも公事が優先するとなれば、公事である仕事に問題が生じないように私事の家族が折れるという構造が

きていると思います。その典型が夫の転勤に伴う妻の離職や家族の転居に子供の転校でしょう。

もつとも、最近増加している父の単身赴任は、「おおよけ」にたいする「わたくし」の復権という側面で見ることでもできます。ただその理由が子供の学校ということになれば、子育てに係わる「おおよけ」が父の「おおよけ」よりも重くなったということかもしれせんが。

機能の問題ではなく関係の問題こそ重要

このように考える時、家族の機能が外部化したということは、家族の機能が少なくなったのではなく、家族と他の家族との関係や家族の外にある社会の仕組みとの関係が変わったということではないでしょうか。すなわち、伝統的な身分関係と地縁や血縁を基盤とする共同体的秩序との関係の中で担われていたものが、相互に独立した家族と家族の、あるいは一つの家族とそれを取り巻く様々な社会の仕組みとの選択の契機をはさんだ関係に変わったといえます。

また、この変化は社会が産業化することにより生じたものです。そのため、相互の関係は恒常的なものから流動的なものに、単純な

ものから複雑なものになりました。そして、何度も述べてきましたように、このような関係の変化により生ずる問題を、私ごとという家族の側の問題として処理しなければならない構造ができたのです。

そして、全てが家庭の主である女性の責任に

その意味で、あえて二〇ページで示した社会に対する家族の二つの機能を使って現代の家族の特性を表現すれば、次のようになると考えます。

①今の社会を仕事により担う人間を支えるために（パーソナリティの安定）、また、②未来の社会を担う人間を育てるために（子供の社会化）、③社会の多種多様な機能を取捨選択しコントロールすることとを、④一組の夫婦のみでなさねばならず、⑤それに伴う問題処理の責任も取らねばならない、ということになります。

家族は機能を外部に出すことにより、かえって無限に拡大する社会の機能を引き込んだといっても過言ではないと思います。機能の種類は二つでも、それを担うためには、社会の全てのシステムと関わりを持つ必要があるからです。

さらに、最も重要なことは、その引き込んだ機能を担うのは一人

の女性であるということですが。

すなわち、①から⑤のことが、家庭でなすべきこととして位置づけられたこと。また、家庭の主^{かみ}に奉られたのが、「おくさん^{おくさん}」である妻としての女性であること。その結果、全てが主婦とよばれる女性のなすべきこととして位置づけられたわけです。

ここに、私事とは家庭における「おんな^{おんな}ども」の世界であり、公事とは職場における男の世界のことである、という性別役割分業の社会的基盤が成立するわけです。

もつとも、男である夫が仕事に出て、女である妻が家庭で家事や育児にたずさわる。このような考え方を、一種の日本の伝統としての健全な家庭の条件と考えている人は多いと思います。

一方、現実には一一一ページに示したように、女性の多くは、M字曲線を描きつつも家庭の外に自分の仕事の世界を見出そうとしています。さらに仕事のみでなくカルチャーセンターやサークルなどのボランティア活動をいければ、M字曲線の第二の山はもつと高いものになるはずですが。

すなわち、①共同体から切り離され私化した家族を主婦としての女性が一身に担うことを前提とする社会の構造。②それを伝統的な

ものとして正当化する社会的な価値意識。③それでもなお家庭の外に自分のなすべきことを見出そうとする多数の女性。

この三つの特性の関係の中に、「現代家族」と、「婦人」と呼ばれる「女性」との関係を明らかにするためのヒントがあるようです。

そこで、次に、この点に注意しながら、ここで述べてきた家族の変化の論点を、戦後の社会の変化の中での家族と女性の姿を追うことにより確認していきたいと思えます。

表3 私(馬居)が住む地域の「おんな」学習ネットワーク

①生活協同組合 ②ぐるうぶあくり(無農薬野菜協同購入グループ) ③小鹿平和を
 考える会(平和レポートの出版・手作り) ④雑誌「こどものしあわせ」を読む会
 ⑤はちばち(絵本、児童書を読む会) ⑥おやこ劇場 ⑦パンの耳 ⑧ユニテ- (進
 歩的婦人の懇話会) ⑨友の会(婦人の友を読む会) ⑩駅南によい図書館をつくる会
 ⑪オープン陶芸の会 ⑫編み物同好会 ⑬テニス同好会 ⑭バレーボール同好会
 ⑮民衆の側に立った日本史を学ぶ会(教科書問題、文句たれの勉強会) ⑯幼児教育
 を考える会 ⑰聖書研究会 ⑱ものみの塔の勉強会 ……その他、学校講師、産
 休講師、塾講師、受験雑誌訪問家庭教師、ピアノ教師など多数…

全て知られていました。遊んでくれたのは年上のいとこ達。

それが小、中、高と上がるにつれ道路が広くなり田圃が住宅に変わ
 わり、若い人は農業を嫌って大阪に出て行きました。電気釜、電気
 掃除機、電気冷蔵庫、電気洗濯機、そしてテレビと電気で動くもの
 が家庭に入ってきたのもこの時期でした。

私の子供達の場合はどうか。カー、クーラー、カラーテレビに抱
 かれて、リモコン、ファミコン、エレクトーンで遊び、友達との約
 束は幼稚園の次男でさえ電話でアポイント。そして、生活する家庭
 は地上十数メートルのコンクリートの壁の中です。

2 専業主婦の誕生

母は仕事を続け、妻は専業主婦と思っていたが

私の母は、私を生んだ一時期を除き働き続けてきました。母だけ
 でなく、私の知る限り近所に昼間から家庭にいた専業主婦は一人。
 それは、当時村で唯一テレビが家庭にあり、学校の宿題として皇太
 子の結婚式の中継をみせてもらった、どこかの高校の校長先生の奥
 さんだけでした。

子供達の場合はどうか。近所、幼稚園、小学校いずれの友達之母
 親もほぼ専業主婦。むしろ、専業主婦の母親でなければ現在の幼稚
 園に子供を通わせることはできないと思います。我が家の子どもが
 通う幼稚園では子供とともに親も教育するのが方針です。

もつとも、子供の友達のお母さん、それは妻の友達でもありませ
 んが、じつと子供の帰りを待っているわけではないことも指摘してお
 きます。

表3は妻が近所の二人の奥さんに「あなたがやっているサークル
 やグループは」と聞いた結果のメモです。実に18余にのぼります。
 ただそのほとんどが、子育てに関わるものではありません。

家庭の外に別の世界を持つかどうか、という意味では、M字曲線
 の谷と山はかなり高く修正しなければならぬようです。そして私
 の妻の場合も既にカーブをあげつつあるようです。

専業主婦は高度成長の裏の主役

図7をみて下さい。そして、申し訳ありませんが、一〇八ページの
 図2と比べて下さい。そうすると核家族と拡大家族の割合に対する
 イメージが変わると思います。

表3 私(馬居)が住む地域の「おんな」学習ネットワーク

①生活協同組合 ②ぐるうぶあぐり(無農薬野菜協同購入グループ) ③小鹿平和を考える会(平和レポートの出版・手作り) ④雑誌「こどものしあわせ」を読む会
 ⑤はちぼち(絵本、児童書を読む会) ⑥おやこ劇場 ⑦パンの耳 ⑧ユニテ- (進歩的婦人の懇話会) ⑨友の会(婦人の友を読む会) ⑩駅南によい図書館をつくる会
 ⑪オープン陶芸の会 ⑫編み物同好会 ⑬テニス同好会 ⑭バレーボール同好会
 ⑮民衆の側に立った日本史を学ぶ会(教科書問題、文句たれの勉強会) ⑯幼児教育を考える会 ⑰聖書研究会 ⑱ものみの塔の勉強会 ……その他、学校講師、産休講師、塾講師、受験雑誌訪問家庭教師、ピアノ教師など多数…

全て知られていました。遊んでくれたのは年上のいとこ達。

それが小、中、高と上がるにつれ道路が広くなり田圃が住宅に変わり、若い人は農業を嫌って大阪に出て行きました。電気釜、電気掃除機、電気冷蔵庫、電気洗濯機、そしてテレビと電気で動くものが家庭に入ってきたものもこの時期でした。

私の子供達の場合はどうか。カー、クーラー、カラーテレビに抱かれて、リモコン、ファミコン、エレクトーンで遊び、友達との約束は幼稚園の次男でさえ電話でアポイント。そして、生活する家庭は地上十数メートルのコンクリートの壁の中です。

2 専業主婦の誕生

母は仕事を続け、妻は専業主婦と思っていたが

私の母は、私を生んだ一時期を除き働き続けてきました。母だけでなく、私の知る限り近所に昼間から家庭にいた専業主婦は一人。それは、当時村で唯一テレビが家庭にあり、学校の宿題として皇太子の結婚式の中継をみせてもらった、どこかの高校の校長先生の奥さんだけでした。

子供達の場合はどうか。近所、幼稚園、小学校いずれの友達も親もほぼ専業主婦。むしろ、専業主婦の母親でなければ現在の幼稚園に子供を通わせることはできないと思います。我が家の子どもが通う幼稚園では子供とともに親も教育するのが方針です。

もつとも、子供の友達のお母さん、それは妻の友達でもありますが、じつと子供の帰りを待っているわけではないことも指摘しておきます。

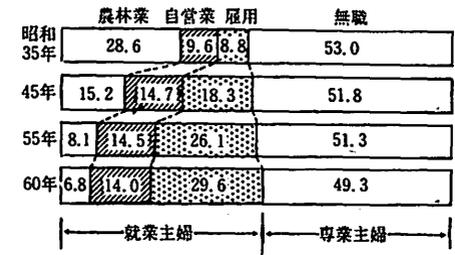
表3は妻が近所の二人の奥さんに「あなたがやっているサークルやグループは」と聞いた結果のメモです。実に18余にのぼります。ただそのほとんどが、子育てに関わることはありません。

家庭の外に別の世界を持つかどうか、という意味では、M字曲線の谷と山はかなり高く修正しなければならぬようです。そして私の妻の場合も既にカーブをあげつつあるようです。

専業主婦は高度成長の裏の主演

図7をみて下さい。そして、申し訳ありませんが、一〇八ページの図2と比べて下さい。そうすると核家族と大家族の割合に対するイメージが変わると思います。

図8 有配偶女性の職業の内容



資料：「国勢調査」
「図説 現代日本の家族問題」より

の形成は、まさにこのような女性とその子供たちの存在によって可能であったと考えます。

3 変わる主婦の世界

専業主婦は男の幻想

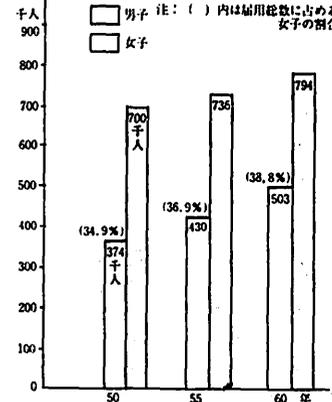
図8をみて下さい。女性は専業主婦という立場にのみいたわけではないようです。

このグラフが示すように、一貫して主婦の半分は働いています。それも、夫の後を追うように農林業が減り、雇用される職業に占める割合が増えています。このデータは昭和三十五年からのものですが、それ以前の日本は農林業、すなわち第一次産業が中心です。それはいうまでもなく家族労働を中心とする産業です。

また、図9を見て下さい。女性の雇用者総数に占める割合も一貫して一定の率を保ち、しかも徐々に増えています。

就業主婦と専業主婦の比率、男女の雇用者数の比率は、私の世代である団塊の世代がM字曲線の第二の山に差し掛かっているため、就業婦人の比率が当分増加するはずですが。

図9 雇用者総数の推移と男女比



資料：「国勢調査」

まして私の妻と友達二人の活動に見るように、家庭以外のもうひとつの世界を持つ女性の比率はかなり高いものとなるはずですが。

このように見えますと、むしろ専業主婦という女性のありかた

は、歴史的社会的には社会の急激な産業化の過程で顕れた一コマにすぎないのかもしれない。あるいは、女性の一生の中では子育て

に極端に手間の掛かる一時期に限られるといえないでしょうか。

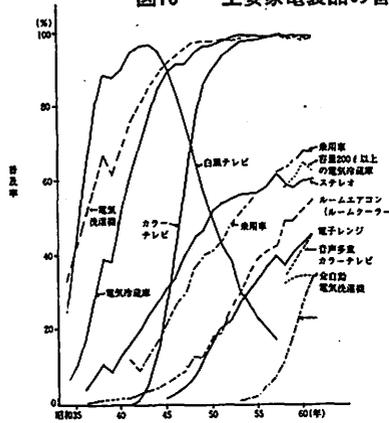
どうも妻は常に家にいるべきだ、というのは、過去も現在も、男の願望ではあっても実態は異なると言えそうです。まして、未来は幻想に終わる可能性が強いようです。

やっと自分を見る余裕ができたが

もちろん、このことは主婦の立場にある女性が家庭の中の役割を担わなかったという意味ではありません。むしろ、子供を育て、夫を支え、姑の機嫌をとり、かつ働いてきたのが日本の女性であったと思います。そして、それを正当化してきたのが母親像の美化であったと思います。

戦後、社会は変われども、岸壁の母、教育ママ、肝っ玉かあさん、ママゴンなどなど、いつの時代にも母を象徴する流行語はありまし

図10 主要家電製品の普及率



資料出所：経済企画庁「家計調査の動向(消費動向調査)」「消費と貯蓄の動向」
 (注)昭和38年以前は人口5万以上の都市の非農家、昭和39年以降は全世帯における普及率である。(科学技術庁「科学技術白書」昭和61年版)

時代と社会が大きく変わり、家族の理念も構造も変わりました。しかし、男がその変化した家族のありかたに即した父親としての顔をなかなか持てないのとは反対に、女から母親の顔をなくすことは簡単ではないようです。むしろ、父親の未発達を母親の先行でやっ

子どもを見なくなったということではなく、女性がつねに育児の責任を担ってきたことの今日的表現だと理解します。やっとな、「子供か仕事か」を選択させられた時代から、「子供も仕事も」選んで生きるこ

それが現在では「家つき、カーつき、ババー付き」になっている

多分否定できないと思います。しかし、それは電化できる部分のみです。子育ては電化できません。家事の電化により浮いた時間とエネルギーを子育てに向けたのが平均的な日本のお母さんではないでしょうか。家庭に新三種の神器が入った時期は、教育爆発の時代でもありました。そして、現在も、一三五ページの表3で示したように、お母さん方の家庭の外に見出した活動の多くは、子育てに係わるものです。

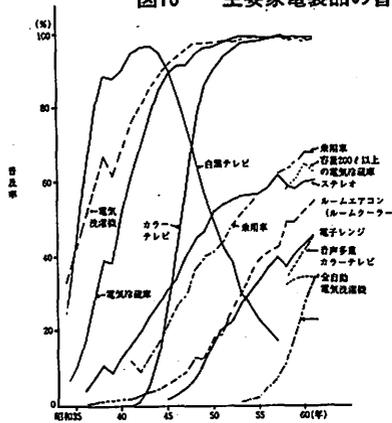
た。その一方で、家庭の外に出ようとする女性を揶揄する言葉の流行もありました。もつとも、流行語の母を意味する言語が変わったように、高度成長の結果得た社会の豊かさは、家族の中における主婦としての女性のありかたを大きく変えたことも事実です。既に何度も述べてきたように、私ごととなった家族においては、それを担う妻の発言権を相対的に高めました。まして、夫が仕事で帰ってこないとなれば、いかに公事にたずさわってしようと、男の家庭での立場は自ずと弱くなるのが自然でしょう。まさに「亭主、元気で留守がいい」とは言えて妙です。

また、たとえ姑がいても、伝統的な共同体的秩序に守られた家制度が崩壊したあとでは、かつてのように嫁として仕える世界に安住してはいないと思います。その変化を示す象徴的な言葉が、昭和三十年代末の流行語の「家つき、カーつき、ババー抜き」です。

それが現在では「家つき、カーつき、ババー付き」になっているようです。この場合の「ババー」とはいうまでもなく、女性が外に出るために子供を見る存在としての姑です。もつとも、「ババー抜き」から「ババー付き」への変化は、母親が

子供を見なくなったということではなく、女性がつねに育児の責任を担ってきたことの今日的表現だと理解します。やっとな、「子供か仕事か」を選択させられた時代から、「子供も仕事も」選んで生きるこ

図10 主要家電製品の普及率



資料出所：経済企画庁「家計調査の動向(消費動向調査)」
「消費と貯蓄の動向」
(注)昭和38年以前は人口5万以上の都市の非農家、昭和39年以降は全世帯における普及率である。(科学技術庁「科学技術白書」昭和61年版)

それでも子供から離れられない
家庭の電化(図10)により主婦の仕事は楽になったといわれます。多分否定できないと思います。しかし、それは電化できる部分のみです。子育ては電化できません。家事の電化により浮いた時間とエネルギーを子育てに向けたのが平均的な日本のお母さんではないでしょうか。家庭に新三種の神器が入った時期は、教育爆発の時代でもありました。そして、現在も、一三五ページの表3で示したように、お母さん方の家庭の外に見出した活動の多くは、子育てに係わるものです。

時代と社会が大きく変わり、家族の理念も構造も変わりました。しかし、男がその変化した家族のありかたに即した父親としての顔をなかなか持てないのとは反対に、女から母親の顔をなくすことは簡単ではないようです。むしろ、父親の未発達を母親の先行でやっ

た。その一方で、家庭の外に出ようとする女性を揶揄する言葉の流行もありました。

もつとも、流行語の母を意味する言語が変わったように、高度成長の結果得た社会の豊かさは、家族の中における主婦としての女性のありかたを大きく変えたことも事実です。

既に何度も述べてきたように、私ごととなった家族においては、それを担う妻の発言権を相対的に高めました。まして、夫が仕事で帰ってこないとなれば、いかに公事にたずさわってしようと、男の家庭での立場は自ずと弱くなるのが自然でしょう。まさに「亭主、元気で留守がいい」とは言いえて妙です。

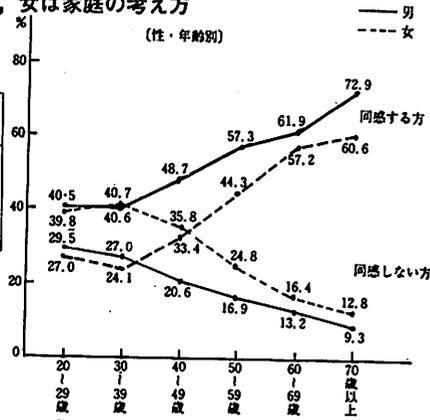
また、たとえ姑がいても、伝統的な共同体的秩序に守られた家制度が崩壊したあとでは、かつてのように嫁として仕える世界に安住してはいないと思います。その変化を示す象徴的な言葉が、昭和三十年代末の流行語の「家つき、カーつき、ババー抜き」です。

それが現在では「家つき、カーつき、ババー付き」になっているようです。この場合の「ババー」とはいうまでもなく、女性が外に出るために子供を見る存在としての姑です。

もつとも、「ババー抜き」から「ババー付き」への変化は、母親が

図11 男は仕事、女は家庭の考え方

	該当者数 人	同感する方		どちらとも いえない		同感しない方		わからない	
		%	%	%	%	%	%		
総数	3,783	43.1	28.0	26.9	2.0				
男	1,635	51.7	26.4	20.2	1.7				
女	2,148	36.6	29.3	31.9	2.2				



(四) 役割の論理から共に生きる家族の世界へ

1 役割の論理を越えて

役割は選べるのが前提

図11をみてください。「男は仕事、女は家庭」という考え方に「同感する」か「同感しない」かをたずねた結果の中から、全体の比率を百分比(%)で示し、年齢別の変化を線グラフで示したものです。全体の男女差をみれば、明らかに男性は「同感する」人が多く、女性も男性よりは少ないものの、やはり「同感する」人が「同感しない」人よりも多いことがわかります。しかし、年齢別にみると様子が変わってきます。

男性の場合、「同感する」人が各年齢とも「同感しない」人より多いものの、二〇〜三〇代は平均より十パーセント以上低く、高齢者ほど高くなる傾向です。それに対し、女性は「同感しない」人の割合が「同感する」人の割合を二〇代で約十四パーセント、三〇代で約十七パーセント上回っています。

三〇代の女性とは、最も数の多い団塊の世代の意識を反映してい

とカバーしているといったほうが正確かもしれません。

どうやら、今日の家族のありかたは女性ではなく男性の変化を必要とする時期にきているようです。そしてそれは、公に傾いていた公私のバランスを、本来の位置に移動すべき時でもあることを意味していると考えます。

そこで、次に、このような傾向を示す幾つかのデータを示しながら、今日の家族と女性のありかたに対する私なりの考えを、簡単に述べていきたいと思います。

表4 子どものしつけ方

(参考) (設問) あなたは子どものしつけ方について、男女の役割を考へて男の子は男の子らしく、女の子は女の子らしくしつけた方がよいと思いますか。それとも同じようにしつけた方がよいと思いますか。

(単位：%)

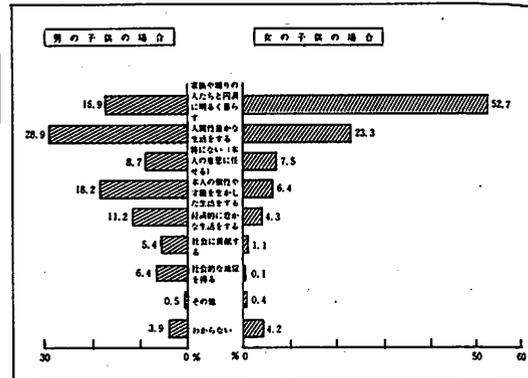
	全体	男	女
女・男らしく	69	76	63
差別なく	22	18	25
どちらとも	9	6	12

(昭和61年6月県政モニター調査)

資料：静岡県生活環境部婦人青少年課

「婦人問題について女子高校生アンケート調査報告書」

図12 子供の将来への期待 (子供がいる人1,936人に)



資料：総理府広報室編「日本人の家庭観」(昭和61年3月調査実施)

力や好み(上野千鶴子)がなければ実質的に選択する機会はないといつてもよいでしょう。その意味で本当は①よりも根本的な問題であると考へます。

男と女の差は家庭でつくられる

図12を見てください。「ご自分のお子さんに将来どのような生き方をしてほしいと思いますか」という質問に対して、男の子と女の子では親の期待は明らかにちがいます。男の子は「人間性豊かな生活をする」「本人の個性や才能を生かした生活をする」が多いのに対し、女の子は「家族や周りの人達と円満に明るく暮らす」が他に比べて圧倒的に多いのがわかります。

ついでに表4も見てください。これは静岡県のデータですが、男女それぞれ「らしくしつけた方がよい」と答えた人は、男性が七十六パーセント、女性が六十三パーセント。「差別なく」と答えた人は平均二十二パーセントと少数派です。

これらのデータが示すように、男の子は男らしく女の子は女らしく育てられているといえます。男と女の差は、生まれながらのものではなく、家庭でつくられるといつても過言でないと思へます。

るとおもいます。それは、私がそうであるように、戦前の社会制度の影響を受けない最初の世代であり、高度成長とともに成長してきた世代です。その意味で今後の方向を示すものと思へます。

したがって、少なくとも意識の次元では男女の性別役割に対する考え方は変わりつつあるといつてもよいでしょう。

しかし、意識とそれが実行できるかどうかは別の問題です。現実

に役割が交換されるためには次の条件が必要だ。

①役割を選択する機会があるかどうか

②選択する意欲があるかどうか

まず、①は社会の制度、特に職場のあり方の問題といえます。公私でわければ公の部分です。この点については論議されることが多く、その結果の一つが男女雇用機会均等法だと思へます。しかし、この問題は本章では守備範囲以外ですので、選択する機会が必要なのは女性のみではなく男性も含めてでなければ意味がない、ということ

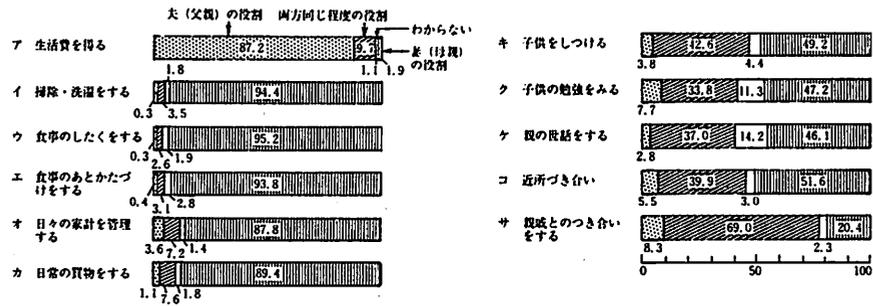
を指摘するに止めます。

問題は②です。これは家族の問題です。なぜなら、男と女の育ち

方の問題、いいかえれば子育てのあり方に関わることだからです。

たとえ制度的に機会を与えられても、男も女も選択する「意思や能

図13 夫婦の役割分担



資料：総理府広報室編『日本人の家庭観』（昭和61年3月調査実施）

最近では、このような側面からの性差の研究が進み、男性・女性として生まれることと、男性・女性となることの違いを明らかにするために、生物学的な意味での性差をセックス、社会的につくられる性差をジェンダーと名付けて区別するようになりました。今、家族の生活する場であり、子供が人間となる場である家庭にとって最も必要なことは、このセックスとジェンダーの違いを理解し、家族一人一人の生き方にどのように展開していくかであると考えます。それは、子育ての問題であるとともに、家庭における父親と母親の関係、夫と妻の関係、一人の男と女の問題でもあります。

2 男と女、親と子、家族と家族が共に生きる地域を

夫は働きバチ、妻はなんでも屋

実際に家族の中で、あるいは家庭という場で、夫は父親、妻は母親、女はどのよう^に生きてい^るので^しょうか。ご自分の家族と生活を振り返りながら図13を見てください。

まず、夫（父親）の家族での役割を見ますと、独占的に行っていることは、「生活費を得る」ことのみです。あとは、妻（母親）と共同で「子供をしつけること」「子供の勉強をみること」「親の世話をする」こと、「近所づきあいをすること」と答えた家族が三割から四割。も^とも、この三種は^いずれも妻（母親）の役割とする家族の方が^多い結果となっています。その中で「親戚とのつきあい」が同じく妻（母親）との共同で七割です。

逆に妻（母親）は、夫（父親）との共同を含めれば、「生活費を得る」以外のほとんど全ての役割を、ほぼ九割以上の家族で担っていることとなります。

要するに、ほとんどの家族では父親は働くだけ。中には子供の面倒や親の世話をしたりする家族もあり、夫婦がそろうのは特別な時だけということでしょう。家族にとって夫は働きバチか家の飾りみたいなもの、それに対して妻はなんでも屋、と自戒を込めて名付けたいとおもいます。

子供にとって存在するのは自分を生ませた男と育てる母のみ。それでも大人である夫婦の間では、一応、役割分担として理解することもできます。しかし、子供にとってはどうでしょう。

子供は基本的に家庭で育ちます。特に、人間としての基礎をつくる幼児期の家庭の影響は大きいといわれます。

家庭とは第一節で家族が生活する場と定義しました。その意味で、父親は家族の中の役割として生活費を稼ぐという役割は持つものの、家庭での役割はほとんど持っていないといえるのではないのでしょうか。逆に家庭という生活の場で子供が接するのは子供を育て家事を担う存在としての母親という女性の一つの側面のみです。

ヒトは生物として成熟した男と女がいれば生むことができます。しかし、人間の子供として育つには社会的な父と母が必要です。また一人の人間として、男と女として成長するには、やはり良くも悪くも模範となる男と女が必要です。

しかし、家庭の中にしか生きる場をもたない子供には、自分がこの世に存在する原因をつくっただけの男性と、自分を育てる顔しか持たない女性しかいないということにはならないでしょうか。少なくとも、家族の中の父の役割が生活費を得ることのみだとすれば、それは夫婦の役割分担であって、父母の役割分担ではなく父の役割放棄だと考えます。

このような父の役割放棄の原因を仕事の論理に求めることは簡単

です。しかし、男は仕事に生きるもの、として育てた母の役割を忘れてはならないと思います。昇進や昇給を期待する妻の存在も無視できないと思います。夫は妻がいて夫であり、父もまたその母により育てられた存在です。「亭主元気で留守がいい」は夫婦の論理であつても父母の論理ではありません。

家族の人間関係は社会の原型

社会は様々な人と人の重なりによりつくられています。その中にあって、人は自分の前にいる相手により様々な顔を持ちます。上司・部下、売る相手・買う相手、息子・娘、好きな人・嫌いな人……。だれを相手にした時の顔が本当の自分か思い悩む人もいるかもしれませんが。私は全て自分であると考えます。自分らしさとは百面相の自分なりの顔し方であり、そのような自分をつくることをアイデンティティの形成といえます。

子供はアイデンティティを形成するための原型を、まず、家族が構成する人間関係の中で学びます。母は子供の父にとっては妻であり、祖父母にとっては娘であり、一人の女でもあるはずで、加えて、仕事を持つ人は別の顔があります。この様々な母の姿を学ぶ過

程が、子供の人間として成長する過程の原型となるわけです。いうまでもなく、父の場合も同様です。

さらに、この過程は意識的ではなく無意識的に繰り返される日常の人間関係の中で成立するものです。すなわち、家庭の中です。もし家庭に存在するのが自分を育てる母の顔のみであれば、子供の人間形成が貧弱なものとなるのは必定でしょう。

母親の就業率の増加に対して、子供への悪影響を心配する声があります。しかし、むしろ母親専業の女性によってのみ育てられる子供の方が心配です。家庭に帰るべきは父親の方でしょう。そして、父親の存在はその相手方の母親の存在との関係であることも忘れないてください。もし物理的に父を子供の前に出すことが困難な状況であれば、せめて父の存在を子供の意味（こころ）の世界に生かす工夫するのは、子供に生を与えた父母の責任ではないでしょうか。

しかし、子供は家族だけでは育たない

子育ての責任をとるのは父母です。しかし、そのことは、全てを父母がなさねばならないということではありません。また、子供を家庭の中でのみ育てねばならないという意味でもありません。

家庭はあくまで原型を形成するところであって、社会に生きる人間をトータルに形成する場ではありません。それを、家族の機能は子供の社会化であるとして、子供は家庭で育てられるとしたところに現代の家族の悲劇があると考えます。まして、母親のみで育てられると考えるのは論外です。

子供が育つということは、子供が家族の外に出て一人の独立した人間として生きるということです。そのための力を子供がつけることができる機会を準備するのが父母の責任です。

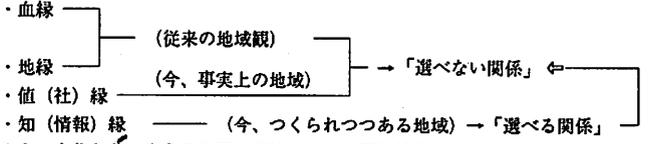
そのために、他人の力が必要です。家族の外の人間関係が子供の生きる社会のモデルになるからです。私にとってそれは年上のいとこ達に始まり、村の大人たちや友達とその家族であったと思います。現在の息子や娘にとっては、かつてに入りこんで遊ぶ同じ官舎の家庭でしょう。

過去も現在もそして未来も、ヒトは一つの家族の中ではなく家族と家族の関係の中で育つことにより、まさに家族を巣立っていく力をつけると考えます。そして、この家族と家族の関係を地域と名付けたいとおもいます。

家族の教育機能の低下を地域の教育力でカバーするという指摘が

表5 私(馬居)が意図する地域再構築への視点

- ①地域観の転換・創造・・・〈住む〉世界を見直しを
 - ・共に育ち、共に学び、共に生きる場としての地域の創造・・・生活者の復権
 - ・国家・社会・男の論理から、ちいき・せいかつ・おんな・こどものくらしへ
 - ・企業、学校、家庭の“間(あいだ)”にある生活の場としての地域づくりを
- ②同質、帰属、運体、秩序、伝統から異質、主体、参加、創造、未来へ
 - ・選べない関係から選べる・選ばれた関係(相互主体化)への地域づくりを
 - *人と人を結びつける四つの“縁(えにし)”・・・人間関係の複合体としての地域



③異なる人・文化と共に生きる世界の構築を・・・国際社会の原型としての地域

なされることが多いと思います。ここに述べるように、私もその必要性を痛感します。しかし、その地域はかつて私が育てられた血縁や地縁により結びついた地域ではありません。それを望んでも今は無理でしょう。また、あえていえば不必要です。なぜなら、このような意味での地域という人間関係を解放することにより得たのが現在の豊かさであり、自由で平等な社会だからです。

今、必要な地域とは、縁あつて他者と共に自己を形成する意味の「時空」、あるいは「選択されたコミュニケーションの網目」、と表現したいと思います。(表5を参考にしてください)

子供にとって必要なのは、人と人の間にあつて、人と人の縁の重なりあいにより、様々な人が、共に住み生きることのできる、意味の世界としての地域です。職業、世代、性、生まれ育った場、学歴など多様な人との出会いこそ子供の未来への財産です。そしてそれは、子供が生きる場を舞台とする父と母の人間関係の豊かさの結果であるともいえます。

(五) そして、すべてが応用問題である

現代家族と婦人の問題が子供と父母という子育ての世界で終わるそうになりましたが、本当はそれではすまないとおもいます。人生八〇年という尺度でみるならば、子育ては一時でしょう。長くみて一人あたり二〇年前後。それも特に手間がかかるのは十年とないかもしれません。まして、一五ページで述べたように、短期間に二人を生む夫婦が多いとすれば、子供に拘束される期間はたかがしれています。それに対し、夫婦の世界は離別しない限り、何れかの死の瞬間まで続きます。たとえ肉体的な消滅があつても多分残つた方の生き方の中に他方は生き続けると思います。

私が妻と知り合つたのは妻が十八歳で私が二十一歳の時でした。平均寿命でいけば六〇年の人生をパートナーとして共に生きることになります。この六〇年の年月が豊かなものになるかどうかは私と妻の共同責任でしょう。あるいは、仕事の世界にしか生きられない男の私よりも、M字曲線を描きつつも、教師、妻、母親、様々なグールの活動と多彩に生きる妻の方が、結果として豊かな八〇年を送るのかもしれない。男の仕事も所詮は停年まで。仕事が自己実

現の王者であった時代は過去に去ったと考えます。

まさに、今、社会の豊かさとは八〇年の人生を前にして、男がつくった「おやおやけ」の世界は、女を閉じ込めたはずの「わたくし」ごとの世界の反乱にあっているのかも知れません。「めどきの時代」とはよくいったものです。

しかし、今、家族をもち婦人として生きている人々に、家族について私が理解し語れることは、せいぜい妻と出会ってからの十七年の経験とそれに先立つ子としての自分の経験しかありません。

その意味で、最初に述べましたように、ここに書いてきたことは私の経験を研究者として少し意味づけたにすぎません。しかし、あえて言えば、いかなる研究や学問であれ、過去の一定の条件のもとで創作された一つの類型にしかすぎないと考えます。

まして、大多数の家族が、そして夫婦が八〇年の人生を生きる時代は史上どこにもなかったはずです。だれも経験したことのない世界へ私達は進んでいるわけです。家族のありかた、そしてそこにおける女性の生き方に答えを書くことはだれもできないはずです。

その中で、ただ一つ確かなことは、それでも家族はなくなり、むしろその重みは増すであろうということです。

社会が複雑になればなるほど、人を育む家族の役割が大きくなると思います。逆にそれだからこそ、マスコミは家族の危機を報道するでしょう。現在でも様々なことがいわれています。しかし、それは実際に危機にあるのではなく、益々重要になる家族が危機におちいらないための警鐘と考えます。

あくまで家族は平均的な傾向で語るものでなく個別の世界にあるものと考えます。一人の男と一人の女が縁あって出会い、最も長い時間と空間を共有する不思議さこそ家族の特性かもしれませぬ。その意味で全てが前にあり応用問題であることを指摘して本章を終わりたいと思います。

参考文献

「女たちのいま」 女性学研究会編 勁草書房 一九八四年

「女という快樂」 上野千鶴子 勁草書房 一九八六年

「現代のエスプリ 236 女30代にして惑う」

稲村博編 至文堂 一九八七年

「男が文化で、女は自然か？」エドウィン・マードナー他

晶文社 一九八七年

目次

第一章 婦人の現状

静岡県立大学国際関係学部 教授 美尾 浩子

(一) 今なぜ婦人問題か	1
1 身近にある婦人問題	1
2 婦人問題は人権の問題	5
3 今を生きる者の責任	7
(二) 婦人問題の所在	10
1 ライフサイクルの変化	10
2 経済・社会の変化	13
3 価値観の変化	16
(三) 婦人問題の系譜	20
1 性差と性差別	20
2 生産と出産	23
3 性別役割分業	26
(四) 性差別への疑問	30
1 欧米では	30
2 日本では	33
3 地球規模で	36
(五) 婦人問題解決への道	40
1 当事者としての女性は	40
2 パートナーとしての男性は	43
3 社会は	47

第二章 婦人の歴史

静岡大学教育学部・助教授 横井 孝

はじめに 53

(一) 「女」の呼称 54

1 女・女性・婦人 54

2 「男」と「女」 57

(二) 「女」の社会史 65

1 結婚形態 65

2 「女」の財産・相続 71

(三) 「女性論」の今昔 78

1 西洋の女性論 78

2 東洋の女性論 83

(四) 「女」の精神史 93

1 古代末期のエピソード 93

2 「女」の物語を読む 97

第三章 現代家族と婦人

静岡大学教育学部・助教授 馬居 政幸

(一) アプローチの仕方について 107

(二) いま、女性にとって家族とは 112

1 現代家族の特性とされるもの 112

2 私の家族の場合 116

3 あらためて現代家族の特性とは 125

(三) 変化の中の家族と婦人 136

1 戦後四十数年、なにが変わったか 136

2 専業主婦の誕生 138

3 変わる主婦の世界 142

(四) 役割の論理から共に生きる家族の世界へ 147

1 役割の論理を超えて 147

2 男と女、親と子、家族と家族が共に生きる地域を 150

(五) そして、すべてが応用問題である 157

第四章 今日の経済情勢と婦人

静岡県立大学助教授 市岡 修

(一) 女子労働の変容

1 我が国の女性の現状

女性のライフサイクルの変化

高度成長経済から低成長・安定成長経済に移行した我が国の経済環境の変化にともなって、女性のライフサイクルならびに経済的地位・行動パターンは大きい変動を示しています。女性の高学歴化は、独身時代の就業可能期間を短縮させるとともに、結婚後の育児期間（長子誕生から末子就学まで）は出産子供数の減少によって短縮し、育児期後の就業可能期間（末子就学から六五歳まで）は伸び、また育児期後の期間（末子就学から本人死亡まで）は女性の平均寿命が伸びたため長期化しました（表1-1）。

女性の高学歴化

女性の最終学歴の上昇は、昭和六十一年「学校基本調査」の全国値で九五%という男子を上回る高校進学率（男子九三%）や、短大・大学進学率に現れています。三四%の女子が短大あるいは大学に進

- 「子育ての社会史」 横山浩司 勁草書房 一九八六年
「現代日本を考える」 日高六郎編 筑摩書房 一九八七年
「住まいの家族学」 外山知徳 丸善 一九八五年
「日本の親・日本の家庭」 山村賢明 金子書房 一九八三年
「働く母親の時代」 岩男寿美子、杉山明子編 日本放送出版協会 一九八四年
「家族問題の社会学」 湯沢雅彦編 サイエンス社 一九八一年
「業書文化の現在5老若の軸・男女の軸」 中村雄二郎編 岩波書店 一九八二年
「21世紀の家族像」 生命保険文化センター編 日本放送出版協会 一九八六年
「図説 現代日本の家族問題」 湯沢雅彦 日本放送出版協会 一九八七年